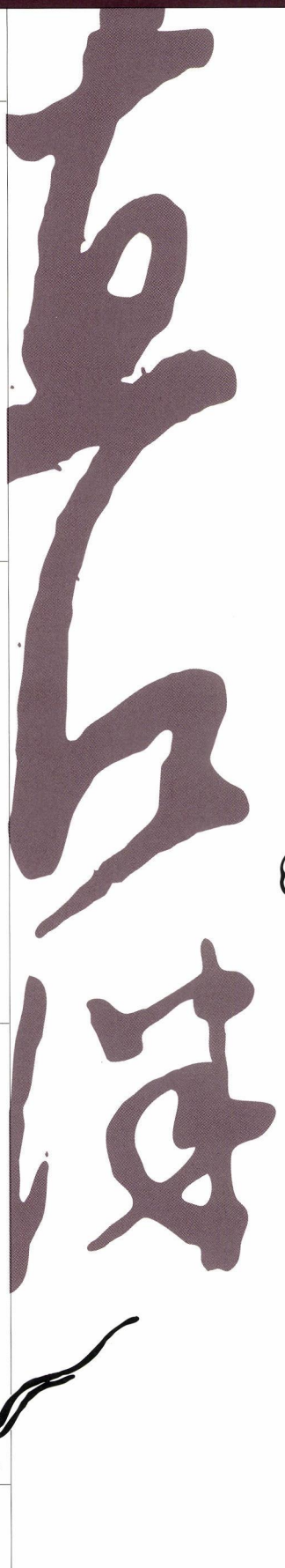
季刊

直江の津



変貌するまち

◉直江津経済文化研究会◉

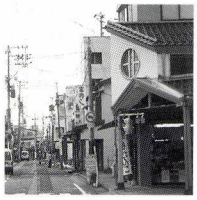
2004

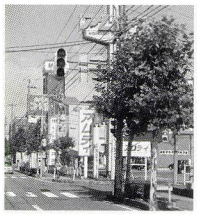
特別号

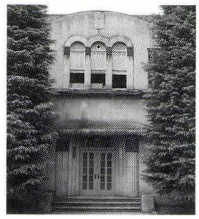
季刊 直江の津 第15号 特別号
2004 — 11

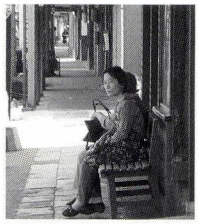
目　　次

高田本町界隈　4
上越大通り　8
稲田橋　10
大町小学校　12
青田川に架かる木の橋　13
ゆるゆかに変貌する仲町　14
変わった高田駅前通り　15
直江津駅前通り　16
変わる直江津駅　18
南小前から直江津橋へ　20
変わる「古城」　22
荒川橋・新町界隈　25
18号線石橋周辺　28
変わる砂丘　30









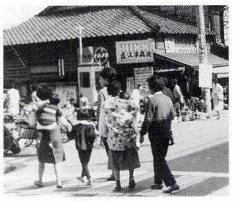


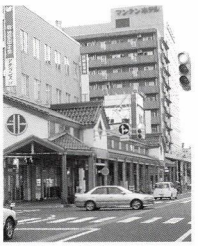
資料
『上越市史　通史編6　現代』　平成14年
『直江津商工会議所名鑑』　昭和49年
『戦後50周年記念誌　50年のあゆみ』　平成7年
『呉服町今昔』　平成9年
『五ノ辻・六ノ辻町の回顧　西城四丁目町史』　平成3年
『町史　暁光』　平成14年
『頸城の足として90年　頸城自動車90周年史』　平成15年
「広報たかだ」
「子ども広報　直江津」

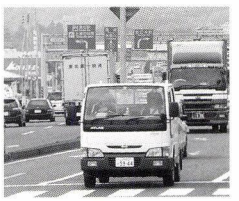
変貌するまち

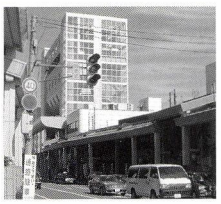
穏やかに変化してきた生活、まちの様相が、
開発・近代化・豊かな未来という名の下に、
昭和四〇年代から、急激なスピードで変貌した。

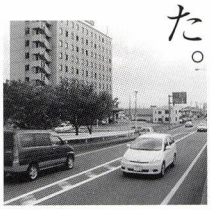
昭和という時代が見直されている昨今、
この〈変貌〉は、まちに何をもたらしたのか。
写真の色が少し変わりつつあるアルバムを開いてみた。

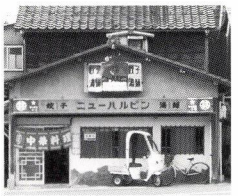




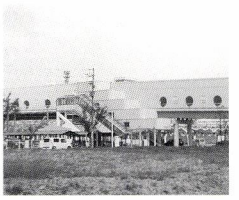












■掲載の写真は、すべて昭和二〇年（一九四五）以降に撮影されたものである。また最新の写真は、平成十六年九月から一〇月に撮影されたものである。

高田本町界隈





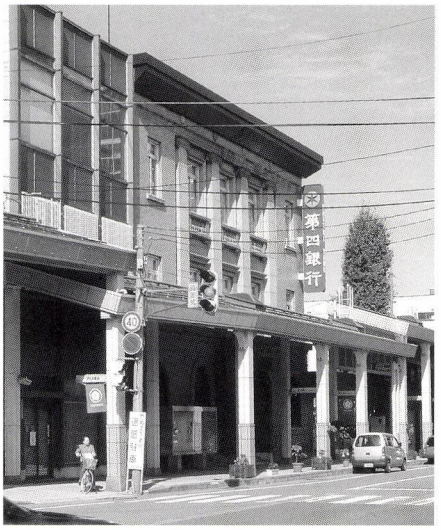
本町４丁目　小酒井園付近

昭和30年代の８月６～10日に行われていた〈高田まつり〉の風景。昭和33年８月の「広報たかだ」に「今年は、仙台の七夕にも劣らぬ、絢爛豪華な〈七夕竹飾り〉約500本を飾るので、かつて見られぬ華やかな行事になるでしょう」とあり、民謡流し、子ども灯篭行列、浄興寺宝物お虫干し、商店街対抗親子のど自慢大会など盛りたくさんの行事があり、花火大会には臨時バスも出された。



大和上越店付近
写真左のマックスファクター化粧品の看板があるあたりから手前は、昭和50年4月、地上5階地下1階の大和上越店（本町共同ショッピングビル）が建った。45年頃の撮影。







第四銀行高田支店
昭和6年(1931)に建てられた鉄筋コンクリートの建物。昭和57年の近代化事業の頃までは写真のような雁木風の付属物が取り付けられていた。





本町３丁目通り
前方右手のビルは「丸庄」（現・マンション）。右手前の映画の看板のあるあたりにもマンションが建った。
横断幕は６月１日の「写真の日」を記念したもので、昭和26年、撮影者小熊和助の尽力によって「写真の日」が制定された。看板に描かれている映画は、昭和26年に公開されたジョン・ウエイン主演の「黄色いリボン」（「総天然色」と書かれている）と、27年５月公開の東映映画「魔像」で、阪東妻三郎、津島恵子、山田五十鈴が出演している。お馬出しの突き当たりにあった文化劇場の看板と思われる。電柱には「本町３丁目 中央有楽街」という看板が取り付けられている。（写真提供　小熊写真館）





本町３丁目と大手町通り（指令部通り）丁字路
サッポロビールのマークと「サロン月世界」（後に喫茶店志留美亜）の看板が揚がるモダンな建物は現在、囲炉裏庵などがある建物。本町の「近代化事業・第４期工事」で取り壊される昭和58年まで建っていた。たばこの看板の左にある看板は中劇の看板。スティーブマックイン主演で1968年（昭43）に製作された「ブリット」が上映されている。

上越大通り





上越大通り　北城町３丁目付近

写真はナルス城北店周辺。右手前方の建物は荻原商会（現・コービドーのあたり）、向かい側の入母屋瓦屋根の建物は上越酸素、昭和35年に向かい側の瀬尾邸（知命堂病院の初代院長邸）の一部を移築したものである。

39年、写真右手裏側一帯の通称「中島たんぼ」が宅地化される「高田都市計画北城土地区画整理事業」が始まった。右奥の森の手前を切って、東本町から上往下橋（かみおうげばし）を通り稲田橋に通じる幅16ｍの幹線道路が開かれた。





上越大通り　大手町交差点付近
舗装工事中の左手の玉垣は榊神社、その先は県立中央病院（平成9年新南町に移転）。前ページの写真周辺の舗装は昭和39年に完了しているので、撮影されたのは同時期と思われる。全線舗装が完了した40年11月に「18号線舗装完成記念　直江津・長野間信越駅伝競争」が開催された。

稲田橋





昭和30年6月に、写真のような鉄筋コンクリートの永久橋に架け替えられたが、57年「激甚災害対策特別区」の指定を受け、80ｍの川幅を220ｍに拡幅し、62年6月に新稲田橋が完成。45年に開通した北城町から通じる都市計画街路（通称バイパス）に直結するようになった。





東本町５丁目から関川に架かる稲田橋を見る。
上の写真の両側の家は通称バイパスに移転した。

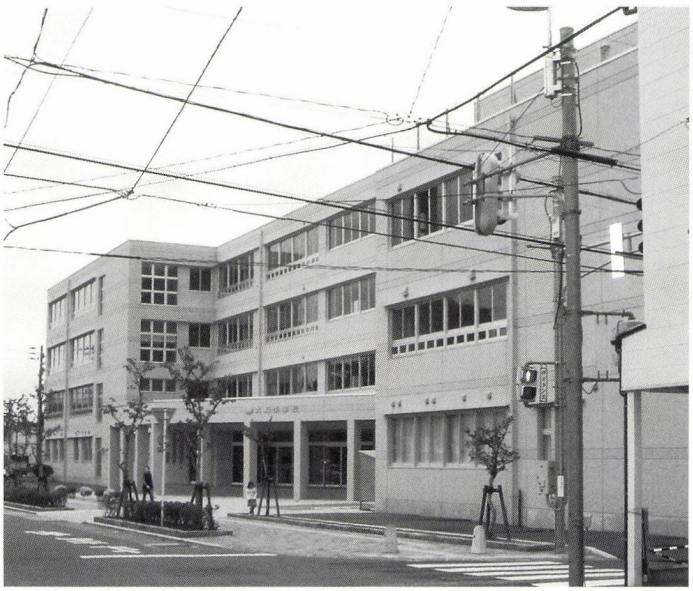
西橋詰から稲田方面を見る。







大町小学校



大町小学校
昭和4年（1929）落成。県下でも屈指の鉄筋コンクリートの校舎として注目された。22年に新学制により高田市立大町中学校となったが、34年、市立大町小学校として発足した。平成15年、惜しまれつつ取り壊され、翌16年新校舎が完成した。上2枚の写真は45年前後の卒業式当日と平成14年2月に撮影されたものである。

青田川に架かる木の橋





小姓人橋（こしょにんばし）

上往下橋（かみおうげばし）が架かるまでは、西城4丁目から北城3丁目（8ページ上段の写真左側、入母屋瓦屋根の建物の脇に出る）に架かる便利な橋であった。昭和63年7月取り壊された。同年3月撮影。



伊勢橋

南本町1丁目と国立病院（上越地域医療センター病院）の東側の南高田町周辺をつなぐ橋。平成4年5月に永久橋に架け替えられた。昭和63年4月撮影。



ゆるやかに変貌する仲町

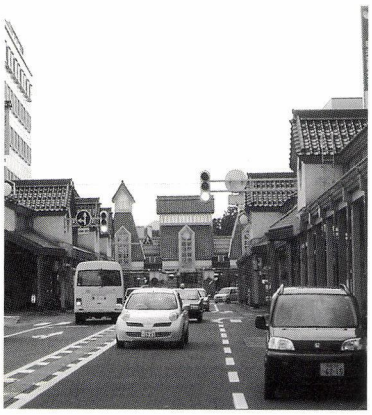




平成２年４月の仲町。飲食店街の性格上、まちの変化は看板の変化でもある。上の写真は駅前通の十字路から上を見る。右手に見える看板の「旅館よしだ」は高田キャッスルホテルと名称を変えビルになった。下の写真は「浮喜世」から上を見る。











右上の写真は「局便郵前駅田高」とレンガ風の壁面に右から書かれた局名も珍しく、映画の撮影にも使われた。平成3年5月撮影。上の写真は昭和11年に建てられたマルケー高田営業所。撮影は30年末から40年初頭。平成9年建てかえられた。駅前通りのアーケード工事に伴なって通りの様相は一変した。



変わった高田駅前通り

直江津駅前通り





昭和 30 年代の駅前通り。左手前のポストに並ぶ看板は中島通りにあった銀座劇場の看板。「日本かく戦えり」「愛情の波紋」「兄とその妹」（池辺良・原節子）いずれも昭和31年製作の映画である。

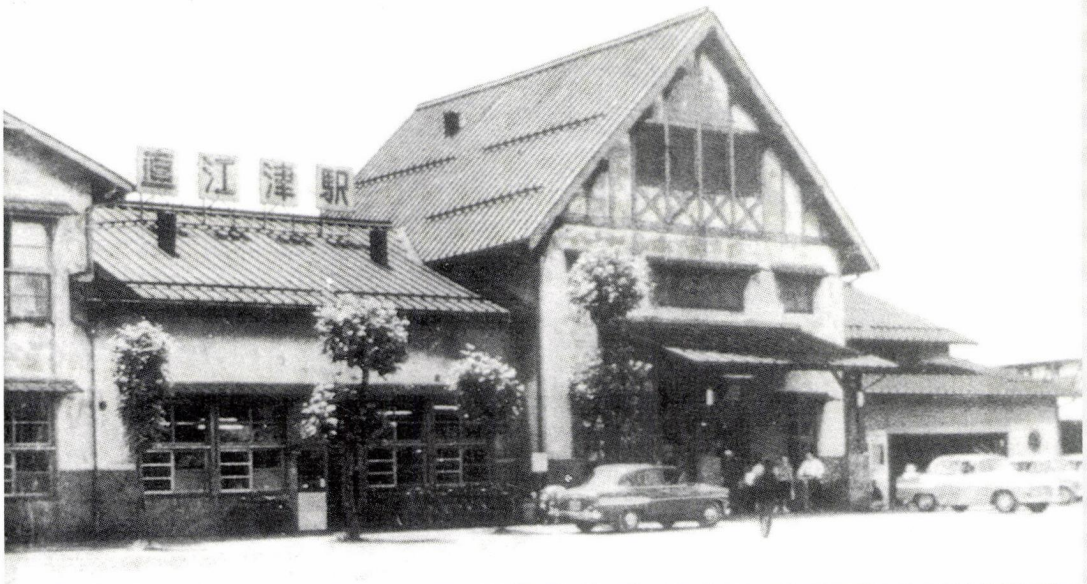


アーケード工事の着工された昭和 40 年 7 月頃の撮影。駅方向から見る。左下の写真は八坂神社参道前から駅方向を見る。





変わる直江津駅



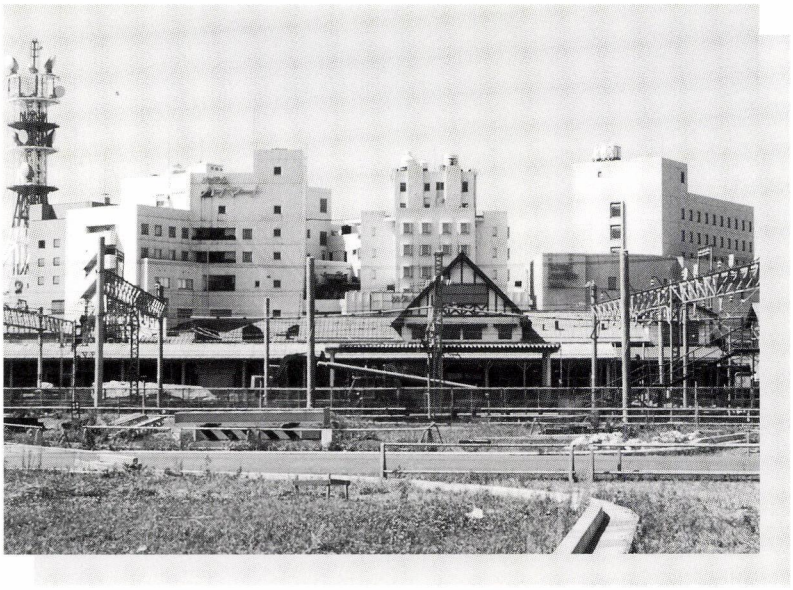
昭和30年頃の直江津駅。建築当時とほぼ同じ姿を止めている。



平成10年撮影。

昭和15年に建てられ、山小屋風の駅舎として親しまれてきたが平成10年取り壊され、平成13年4月新しい駅舎に生まれ変わった。

駅南から見る。平成 10 年撮影。





新しい直江津駅。右下の写真は南北自由通路と南口。











直江津南小学校前の丁字路。左上の写真の竹田化粧品店は、今はレストランになっている。右の写真は南小学校前から駅前通り方向を見る。手前にある映画の看板は、中村錦之助主演の「関の弥太っぺ」昭和38年11月、「図々しい奴」39年1月公開の映画で、住吉町にあった東映劇場で公開されていた。警察官立会いで何かの調査が行われた時に撮影されたもの。バスの横に角巻き雪下駄姿の女がかろうじて見えるので季節と時代が分かる。

南小前から直江津橋へ

直江津橋から西、麓病院方向を見る。昭和40年前後の撮影と思われる。57年から62年にかけて実施された「激特事業」により川幅が230ｍに広がり、手前の十字路から直江津橋側にあった町が無くなった。





下の写真は、上とほぼ同位置から見た直江津橋。写真左の電柱の後ろに「関川」の看板がある。46年7月、建設省（国土交通省）北陸地方建設局が関川改修の法線を発表し、この前後に「荒川」の表記から「関川」の表記に変わっている。63年に現在のような橋に生まれ変わり、欄干の所々に「安寿と厨子王」の物語のレリーフがはめ込まれている。





変わる「古城」





昭和33年の直江津港河口分離による直江津港の整備拡大に伴い、37年から42年にかけて県営で「港町土地区画整理事業」が行われた。国道8号線(町内を通っていた)を2倍の16mに、古城児童公園の南側を通る大瀁直江津線を11メートルに拡幅・舗装し、幅18メートルの港源入線(国道350号線)をみなと橋まで開設させた。そのため500戸以上にもおよぶ家屋の移転・転出があった。

上の写真は、34年7月の古城橋北詰から南、川原町方向を見ている。左手は阿部精肉店とフジタストアで、右手前の人は弁当を手にしている。まだ明るい夏の退社風景である。



前ページと同位置から同じ時間に港方向を見ている。



北詰から港方向を見た朝の出勤時間と思われる。荷役の女子衆の後姿と自転車の人、トラックが走りラッシュの様相を呈している。昭和34年7月。

36年8月の古城橋南詰の夕景。古城橋へ左折しようとするマルケーのバスは満員の通勤・通学客を乗せている。バスの位置は平和記念公園の横を通る道で、ここがバス路線だった。







三菱化成のアルミナを輸送するタンクローリーと区画整理前の古城の通り。アルミナ船の第1号は昭和38年入港。右下の写真は区画整理されて間もなくの風景。タンクローリーの右に見える建物は直江津信金古城支店。53年に向かい側の現在地へ移転した。

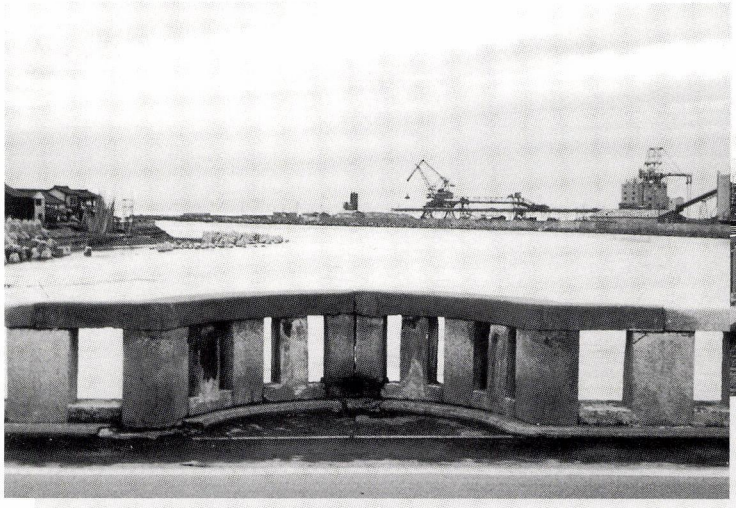


荒川橋・新町界隈





昭和９年に架けられた当時の面影を残す荒川橋を着物姿の女性が歩いている。同時に撮影された左下の写真には、バルコニー風になった欄干の向こうに三菱化成のアルミナのサイロが見えるので、操業を開始した昭和 38 年から 40 年代の写真と思われる。左上の写真に見える線路は、通称「浜線」で、突き当たりに見える漁協の建物のあたりが荒川橋の西詰。浜線が機能していたころは、建物は当然なかった。現在の荒川橋は平成６年に架けかえられた。





柿村園と直江津郵便局前の交差点で入学式に向う親子の交通指導。昭和 43 年。





昭和 40 年、36 回メーデーの行進。八十二銀行は 42 年に現在地へ転出した。その向こうは直江津郵便局。



写真右手のビル（現シンエツ印刷）は昭和 44 年、直江津専門店会によってオープンした上越地方初の協業化店舗「まるせんデパート」。地上 3 階、地下 1 階、食堂や屋上展望台もあった。手前のマルケーのワンマンバスは 40 年から走り始めた。







昭和39年6月に開催された第19回国体新潟大会の炬火(きょか)リレーが行われた。写真は新町通りで荒川橋方向を見る。左の写真は、横町通りから新町通りへ曲がる丁字路を見る。突き当たりの森代吉商店は改築中。



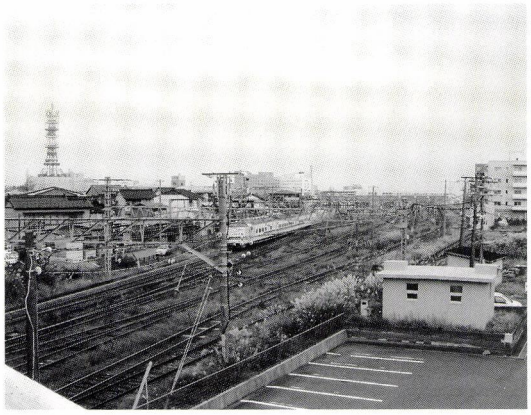




右の写真の映画の看板は「第一劇場」。1967年（昭42）製作のドイツ映画「カルメンベビー」が上映されている。テーラー柳沢の看板の向こうに「銀座劇場」もあった。



昭和 31 年、国道 18 号線（上越大通り）御館橋陸橋から直江津駅構内を望む。





昭和 39 年 6 月に行われた第 19 回国体新潟大会の炬火（きょか）リレーが御館橋陸橋にさしかかる。ランナーは直江津中学校の生徒達。写真左の新築中の建物は「直江津オフィス」、場所は現在ホテルα－1 の建つあたり。



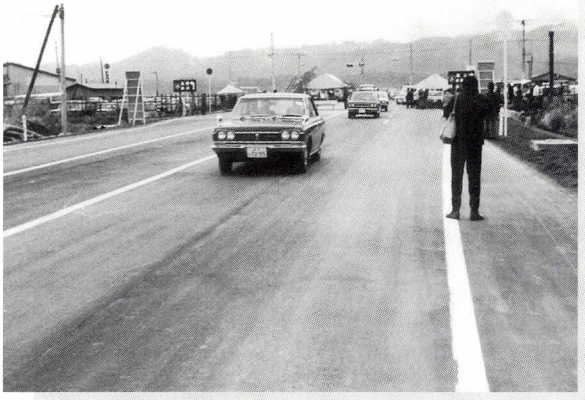
18号線石橋周辺



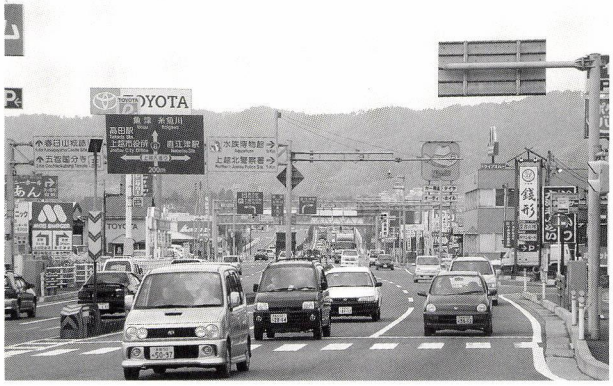
造成中の「御館公園」から見た国道18号線方向。御館は39・40年に発掘調査が行われ、そのあと公園として造成された。荻原式一輪車の看板の上に見えるのは市のガスタンクの櫓で、現在市民いこいの家がある。







国道8号線直江津バイパスが昭和45年12月、国道18号石橋交差点から国道253号線三ツ屋交差点まで開通した（49年全線開通）。上は開通式のパレードで、18号線方向を見る。左の写真の右に見える塔は、ラジオ新潟（現ＢＳＮ）直江津放送局の送信塔。



変わる砂丘

昭和39年6月に開催された第19回国体新潟大会の卓球競技が直江津高校を中心に開催され、それに合わせて日野宮神社の砂丘を開削し、直江津の町内から市民会館に突き当たる通称国体道路が開かれた。写真左の建物は日野宮神社で開削前は砂丘の上にあった。社会教育館方向から東方向を見る。







左手に見えるのは直江津中学のコンクリートのフエンス。前方は市民会館（現・直江津図書館）、建築中の建物は社会教育館。





わくら楼の向こうに見える鉄塔は、昭和44年7月営業開始されたＫＤＤの日本海海底ケーブル中継所。890㎞先のナホトカを経由しヨーロッパと国際電話で結ばれた。昭和53年撮影。手前のわくら楼の跡地に平成12年、社会福祉法人えちご府中会の老健施設「国府の里」が開設された。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

■変貌――、それは、戦後の復興から「もう戦後ではない」と言わしめるまでに到った高度経成長の真っただ中で育った者にとって、〈開発・近代化・発展〉という言葉と同義語であった。

そこには希望に満ちた明るい未来があり、まちや街路の変貌は、豊かな生活を約束する目に見える証に他ならなかった。しかし、結果はどうであったのか…。

〈守る〉は悪とされ、全てを覆して建てた〈塔〉は、今だ古びていないのだろうか。

第4巻4号　12月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」特別号
第四巻三号　通巻十五号
発行日／平成十六年十一月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五（五四五）〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津



発行／平成十六年十一月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)